

昭和20年豪雪

青森市民図書館歴史資料室
室長 工藤 大輔



昭和30年頃の除雪風景(場所不明)歴史資料室蔵

記憶に新しい令和7/8年(2025/26)の豪雪では、青森市内の積雪深を表現する際に「81年振り」と形容されることしばしばありました。81年前、すなわち昭和20年(1945)2月21日の20.9cmが、青森市の最大積雪深の記録なのです。

この冬は昭和19年11月上旬(翌年2月下旬までに2、3日雪が降らなかったのが3回で、しかも積雪深が15.0cm以上の状態が約2か月間続いたといえます(『新青森市史』別編4自然)。しかも、当時は戦時中、何よりも戦争遂行が優先される時代でした。では、当時の青森市民はこの雪とどう向き合ったので

しょうか。当時の新聞記事から振り返っていくことにします。

2月21日の直前となる17日の紙面では、「記録破りの大雪」は「決戦輸送を阻害」するもので、「実に敵米英に匹敵する強敵」とし、「雪退治は断じて地道なる新作戰を必要とする」と報じています。ここでいう「決戦輸送」とは、「決戦下石炭輸送」、つまり鉄道による「北海道炭の内地輸送といふ大きい役割」を完遂して「兵器の生産能力を昂める」ことをいいます。

そのために、昭和19年11月16日に青森鉄道管理部は対策協議会を開催して「重要物資輸送完遂」を確認しています。具体的には、除雪人夫の充足、除雪列車・排雪列車運行の強化、雪囲いなどについて協議したようです。実は、10月11日に国鉄はダイヤ改正を行い、京浜・中京・京阪神などの地域の主要駅に運送ノルマを課したのでした。そのなかに「青函」も含まれ、青森鉄道管理部の部長は北海道炭をはじめ、木材・主要食料の

輸送力を増強することで「東北本線は日本の兵站基地である東北地方の大動脈」としての重要度が増したと語っています。ですから、この冬においては、「決戦輸送」＝駅構内・操車場での除雪の徹底ということになったのです。

当時、仙台鉄道管理局管内で唯一青森にはロータリー車が配備されていました。しかし、電線などの障害物や激しい吹雪に弱く、操車場では使えないことから、除雪に「人手」は必要となります。

記事による除雪の初見は12月16日のことで、管理部長を先頭に170人の職員が参加して、午前7時半から5時間作業を行い「大戦果を収めて」完了しました。しかし、止まることのない降雪は、東北・奥羽両本線のダイヤ大きく乱し、12月下旬の時点では輸送目標の50%に届かない状況でした。そこで、石炭輸送を増強・優先するため、旅客列車の一部を運休にせざるを得なくなり。さらに、12月

23日には鉄道職員ではない「労報特別挺身青森中隊」を除雪に動員しました。このとき新聞は、夫の代わりに出勤した妻の働きぶりを「美談」として報じています。

一方、食料輸送に関しては、ダイヤの乱れと貨車不足により豊漁だったタラの津軽地方への輸送が困難になりました。そこで12月18～19日にかけて、五所川原・大鰐・木造・弘前・黒石・板柳方面から約100台の荷馬車を動員して運ぶことにしました。

さて、雪は年を越してもなお降り続けます。そこで今度は1月6～20日にかけて「学徒部隊」がのべ約2700人除雪に出勤しています(12月にも約2000人動員)。さらに、1月8日には「在郷軍人会青森市連合分会員」約1400人が動員されました。

このとき支部長は「単なる除雪と考へず、大事な戦力となる尊い仕事と思ひ」「敢闘」するよう激を飛ばしています。1月20日

現在での動員数はのべ11万5000人で、費用も前の冬の8倍になりました。

こうした市民を巻き込んだ除雪の結果、2月に入ると「重要物資輸送はいよいよ軌道に乗り、7日頃から平常化の見込みが立った」といいます。なお、5月29～6月1日、青森鉄道管理部は、除雪に出勤した市民などへお礼として松竹少女歌劇団を招いて慰安演劇会を開催しました。

つぎに市民生活にも目を向けておきましょう。1月21日(日曜日)に県警察部は各警察・警防団長などに対し、屋根の除雪を急ぐこと、道路上の雪を踏み固めること、雪による事故を極力防止するよう指示しています。この頃、屋根雪による家屋・倉庫の倒壊が青森市や蟹田町で発生していました。また、大島弘夫知事も職員に対してこの日、「決戦執務」もいなければ、午後は自由退庁にするので、自宅の雪下ろしをするよう勧めています。

青森市では千葉伝蔵市長の「ひとりではやってはたいぎな雪下ろし」という体験から、1月27～31日にかけて「挙市除雪運動」を展開し、隣組単位の共同除雪をしました。

さて、2月も後半になると降雪・積雪も落ち着いたのでしょうか、新聞の視点は除雪から「増産」に向けられます。論説では減収では農家の面目は立たないのだから、「必死の特攻隊に依じて決死の増産でなければならぬ」とし、県も月末には「消費促進運動」の要綱を発表しています。ここでは、労力不足の町村では「学徒」「非農家」のほか国民学校5年以上の児童の「奉仕」を仰ぐとしています。除雪・増産はまさに「総動員」でした。

しかし雪解けは遅く、5月中旬の時点では「冷害の傾向」も出てきました。「雪は豊年の瑞」「雪は五穀の精」ともいいますが、昭和21年春、青森市は深刻な米不足に見舞われることになりました。